

トークセッション

いま、福島から 日本社会の何が見えるのか

ソ キョンシク とよだ なおみ
徐 京植 × 豊田直巳



「3・11」から7年——この国では「震災」も「原発事故」も「過去の出来事」として歴史の片隅へと追いやられ、「未来志向」がその「記憶」の希釈化に拍車をかけている。福島を共に歩いた作家と写真家の目に、何が見えるのか。チェルノブイリの“石棺”のようにこの国を覆い、人々を窒息させる全体主義について語り合う。

徐京植：1951年生まれ。作家・東京経済大学現代法学部教授。人権論・芸術論。福島原発事故関連の著書に『フクシマを歩いて』（毎日新聞社）、『フクシマ以後の思想をもとめて』（共著、平凡社）、『奪われた野にも春は来るか』（共著、高文研）がある。近刊に『日本リベラル派の頹落』（高文研）。

豊田直巳：フォトジャーナリスト。1956年生まれ。長年にわたり、イラクやパレスチナなどの紛争地を取材。チェルノブイリの取材経験をもとに、近年（東日本大震災後）は福島（飯館村）を中心に取材活動を継続し、映画製作にも取り組む。福島原発事故関連の書籍に『福島を生きる人々』『福島 原発震災のまち』（ともに岩波書店）、『フクシマ元年』（毎日新聞社）、映画『奪われた村—避難5年目の飯館村民』『遺言—原発さえなければ』がある。最新刊に『「孫たちは帰らない」けれど』（農文協）。

日時：2018年5月23日（水）
19時開始、20時終了

※入場無料

会場：農文協・農業書センター
（神田神保町・サンドラッグ3階、三田線・
新宿線・半蔵門線「神保町駅A6出口」
徒歩1分）

問合せ：農文協・農業書センター
03-6261-4760

